

近代に見られる「ラ行子音」の音声分析

内 田 智 子

はじめに

近代の文典類には、ローマ字表記の五十音図が掲載されていることが多いが、その多くは、音図上のラ行の子音を【R】で表記している。現代のローマ字でも、ラ行子音は一般的に【R】で表記される。一方で、音声学的には英語の【R】が示す音と、日本語のラ行子音は異なる音であることが、明治期以降、様々な研究者たちによって指摘されている。(本稿では、以下、表記を問題にする際には【 】を使用することとする。また、大文字か小文字かの区別が必要でない箇所は、引用部分を除き原則大文字で表記する)。

日本人の間に、アルファベット導入時から現代まで一貫して「日本語のラ行子音 = 【R】」という認識があったわけではない。近世期の例を見ると、蘭学者前野良沢が作成した、ローマ字表記の音図では、ラ行子音に【L】と【R】の2種、大槻玄沢の音図では、ラ行子音に【L】のみが記載されている。そしてこれは明治期以降【R】に置き換わっていく。また、明治期以降、英語が多くの人々に学ばれるようになり、英語の【L】【R】が示す音と日本語のラ行子音との関係性についても考察が深められる。西洋音声学の枠組みやIPAの導入によって、ラ行子音に対する考察はさらに深まり、現在に至る。

本稿では、近代の資料に見られるラ行子音についての記述を参照し、当時の日本人がラ行子音をどのように捉えていたかを明らかにしたい。

1 近世の蘭学資料に見られる「ラ行子音」に対する記述

ラ行子音の問題を考えるにあたり、重要な要素となるのが、「外国語音と

の接触」である。日本人がオランダ語の音声に接することが契機となって、ラ行子音に対する考察が始まったと言えそうである。その際、オランダ語の文字が、母音と子音を分析的に表示する音素文字であったことも、その後の英学への流れの中において重要な意味を持つ。

近世において、オランダ語に接していたのは、蘭学者たちである。蘭学者によるオランダ語の入門書には、ローマ字表記の五十音図が掲載されていることが多く、初学者たちはこれにより「母音」や「子音」の概念を学んでいた⁽¹⁾。

前野良沢（天明 5/1785）『和蘭訳筌』に掲載された音図のラ行は、以下のようになっている。（直接本論に関係ある箇所のみを抜粋、横型に改編）

R	卷舌 ra	re	ri	ro	roe
	ラ	レ	リ	ロ	ル
L	la	le	li	lo	loe

ここではラ行子音に【R】とともに【L】が記載され、【R】については「卷舌」と書かれている。『日本思想大系 64 洋学上』の『和蘭訳筌』には、この「卷舌」について、「卷舌音（rolled sound）。発音するとき舌端をふるわせて出す音。オランダ語では、卷舌音の r に対して、l は側音（舌先を上歯か上の歯茎に密着させ、声を帯びた息を舌の両側から流出させる音）である。」と注がつけてある。ここから判断する限り、オランダ語の【R】と【L】が示す音は、英語の【R】と【L】が示す音とほぼ同じと考えてよいと思われる。

『和蘭訳筌』では【L】に対しては特に注記はなく、【R】に「卷舌」と書かれている。ここから、前野良沢は、日本語の一般的なラ行子音にはおそらく【L】が当たると考えていたと思われる。同じく蘭学者である大槻玄沢（天明 8/1788）『蘭学階梯』にも、ローマ字表記の五十音図が掲載されている。ここでは、ラ行子音に【L】が書かれており、【R】は記載されていない。ラ行子音や【L】【R】が示す音声についての記述はないが、大槻玄沢も、日本語のラ行子音はオランダ語で【L】で表記される音だと考えていたようである。

オランダ通詞出身の蘭学者、中野柳圃による『西音発微』（文政 9/1826）という書物がある。オランダ語を習得した中野柳圃が、その知識を使って、当時の日本語音を様々な角度から分析しており、ラ行音についての記述もある。ラ行音については、まず「舌音」という記載があり、以下の記述が

ある。

此経ノ音（引用者注：ラ行音）前ノカサタナハマノ六経ノ例ノ如シ 但
舌尖音滾舌音ノ別アリ 此方其音アリテ其仮字ナシ

これについて、杉本つとむ（1967）は、以下のように説明している。

ハ行音と同じく問題になるものにラ行音がある。柳圃が＜舌尖音滾舌音＞と区別しているもので、前者が現代の音声学でいう＜舌尖側面音 [l]＞という言い方に近く、後者が＜舌尖のふるえ音 [r]＞に近い。一般に日本語は r 音で l 音はないとされている。しかし、柳圃は＜此方其音アリテ其仮字ナシ＞と日本語にも r と l の両方のあることを述べている。

そのうえで、『西音発微』の他の箇所などに、ラ行音を【R】で示している記述があること等その他の記述を検討し、柳圃が日本語のラ行音を「一般には（中略）＜滾舌鼓気音＞（滾はふるえころがる・弾くなどの意）と考えていたようである」と述べている。また、大槻玄沢が著した『蘭学佩觿』の和歌をローマナイズした箇所では、ラ行子音に【L】を当てていることも指摘している。

以上のように、近世の蘭学では、ラ行子音に【R】とともに【L】も当てられている。

一方、当時の国学では、ラ行子音についての具体的な記述はほとんど見られない。ただし、悉曇学の中では、中世以降、五十音図に調音部位が記載されるようになり、ラ行に対しては「舌」という記述が、江戸時代まで継承されている。中世以来の韻鏡研究も同様である。前掲の中野柳圃の「舌音」の表記も、これらの影響を受けたものと思われる。

2 明治前半期に見られる「ラ行子音」に対する記述

次に、明治前半期におけるラ行子音の捉え方を見ていきたい。この時期に見られるラ行子音への言及は、ほとんどが英文典によるものであり、英語の【L】や【R】の発音を説明する際に、日本語のラ行音との比較がなされていることが多い。

まず、日本人による記述ではないが、その後の日本語のローマ字表記に大きな影響を与えた、ヘボンの記述を見ておきたい。

ヘボン（慶応 4/1867 初版）『和英語林集成』では、初版からラ行子音は

【R】で表示される。【R】については、初版から「r in ra, re, ro, ru, has the sound of the English r; but in ri it is pronounced more like d. But this is not invariable, as many natives give it the common r sound.」という記述があるものの、ラ行子音と【L】を関連付けた記述はない。高橋正夫(1986)は、日本語のラ行子音がアメリカ人にどう聞こえるかという実験を行っている。結果、「語頭や前高母音に隣接する場合は、英語の /d/ と知覚され」「アクセントのある低・後母音を後続する」ときは「/r/ と判定される」ことが多いこと、「/l/ と聞こえることはどの環境でもまれであることが判明」したとされている。ヘボンにも、日本語のラ行子音は、英語の【L】が表示する音には聞こえなかったことが推測される⁽²⁾。このヘボンによるローマ字表記は、『和英語林集成』とともに当時の英語学習者の間に広まり、また漢字廃止・ローマ字採用を唱える人々にも大きな影響を与えた。実際、明治中期から見られるローマ字採用論の中で、ラ行子音を【R】で表記することにおいては、ヘボン式論者、日本式論者ともに特に問題にはしていない。昭和12(1937)年に内閣訓令として出された訓令式ローマ字でも、ラ行子音は【R】である。

ヘボンがラ行子音を【R】で表記したことが、当時の音声研究に影響を与えていることも事実であるが、その一方で、当時の日本人研究者たちが、ラ行子音が英語の【R】と完全に同じ音であるという認識を持っていたわけではない。以下では、明治20年ごろまでの英文典の記述から、日本語のラ行子音と関連付けた記述を見ていきたい。

青木輔清(明治4/1871)『横文字独学 英学部 初編』には、前節で見たようなローマ字表記の五十音図が掲載されており、ラ行子音は【R】で表記されている。他にも、島一徳(桂潭)校(明治4/1871序)『童蒙英学初歩』、松岡啓(明治4/1871)『洋学楷梯』、亜遊居人(明治5/1872)『英学教授』などにもローマ字表記の音図があり、同じくラ行子音は【R】となっている。このローマ字表記の音図は明治中期あたりでも見られるが、音図のラ行子音は基本的に【R】で表示されている。

明治6(1873)年の『英学辞訓』に掲載されたローマ字表記の音図も、ラ行子音は【R】である。ここでは英語の【R】の発音について説明があり、「r ハマキ舌ノ音ニテ日本ノラリルレロニチカキナリ」と記載されている。英語についての著作であるので、【L】についても言及がある。【L】については「L ハ舌ノ頭ヲ長ク延ヘテ呼フ 稍ウニ近クキコユ 此音ハ印度支那

トモニアリテ日本ニナシト知ルベシ」とある。ここでは、【R】がラ行子音に近い音であること、巻舌の音であることが指摘され、【L】は「ウ」の音に近いこと、日本には存在しない音とされている。

明治18(1885)年の『英語独案内』では、【L】と【R】について、以下の記述がある。

LRトハ何レモラリルレロニ訳スレトモRハ巻舌ノ音ニテラリルレロト呼ビLハ舌ノ先ヲ長ク延ヘテラリルレロトワキウエオノ間ヲ唱ヘ稍々ウニ近シ

ここでは、【L】にも【R】にもラ行音を当てるものの、『英学辞訓』と同様、【R】が巻舌のラ行音、【L】は「ウ」に近い音であることが述べられる。

青木輔清(明治18/1885)『英学童子解』では、【R】の音の説明として「巻舌ニテ(ラリルレロ)ノ音ヲ生ズルノミ」とある。【L】にはラ行音と関連付けた記述は見られない。

明治19(1886)年の『スペリング独学』では、「l ト r トハ他ノ文字ト合シテ同一ノ音ヲ発スルガ如クナレトモ其実ハ大ニ異ナル所アリ 左レド我仮名ヲ以テ明ラカニ之カ区別ヲ表シ難シ 依テ此書ニ於テハlニハ単ニラリルレロノ仮名ヲ付シrニハルアルイルウルエルノ仮名ヲ付シテソノ区別アルヲ示セリ」としている。「ラリルレロ」という仮名を【L】に当てているところからは、【L】が日本語のラ行子音に近いと認識している可能性がある。

高橋五郎(明治19/1886)『英米語学独案内』には【L】【R】ともに「ラリルレロ」等ノ音ノ本ナリ」とある。ただし、【R】については、「此子韻ガ母韻ノ前ニ来ル時ハスコットランド人ハ巻舌ニテ之ヲ言ドモ英米ニテハ極輕ク之ヲ響カスヲ常トス 我国ノ「ラリルレロ」ノ如シ」とある。英語の【R】が示す音について、巻舌である場合とない場合とがあることを指摘し、日本語のラ行子音は巻舌ではないことを示している。現代でも、日本人は英語の【L】と【R】の示す音を発音し分けるのが苦手だと言われるが、明治期の英文典でも、『英米語学独案内』のように【L】にも【R】にも「ラリルレロ」という仮名を振るものはそれほど珍しくない。

長野一枝訳(明治20/1887)『ウキルソン氏第一リードル講義』では、【R】については「rは母音の前に在りて其母音と合して発するときは我国のラ、リ、ル、レ、ロと同音なれども母音の後にある時は発音甚だ輕クアの如く」とある。一方で【L】については「舌の尖を上齒の背後に押当てて発する

ラ、リ、ル、レ、ロの音にして我国には絶てなき音なり」としている。【L】の発音を「我国には絶てなき音」と述べていることから、ここではラ行子音は英語の【R】と見ていると判断してよい。

吉村秀蔵訳（明治 20/1887）『英語発音独案内』では、【L】について「日本語中ニ嘗テナキ」とし「元来是音タルヤ日本人ノ夢ニダモ知ザル」と述べている。ただ、【R】についてもラ行子音と関連付けた記述はない。

佐藤重道編訳（明治 21/1888）『英語発音解』には【L】について「邦音ニ類ヲ見サル音ニシテ」とある。【R】については「ラリルレロノ子音原素ナリ 邦音ヨリ強ク舌頭ヲ動カス音ナリ」とある。

以上より、この時期の英文典では、英語の【R】が示す音が日本語のラ行子音に近いという記述が多いと言えそうである。また【R】には「巻舌」の音であることが書かれることも多い。一方で、英語の【L】が示す音をラ行音と関連付けたものも見られるものの、【L】のみをラ行子音と関連付けるような記述は見られない。

全体を通して、明治 20 年ごろまでのラ行音に対する言及としては、英文典が中心であること、英語の発音との比較が中心であり、ラ行子音は英語の【R】に「近い」音と認識されていたことが分かる。英文典は英語の発音を説明することが目的なので、日本語音の発音法が自明のものとして扱われ、日本語のラ行子音の発音の分析をしていないのは当然のことであろう。英語の【R】が示す音について、日本語のラ行子音との比較においては「巻舌かどうか」という観点にとどまり、それ以上の分析はされていない。

3 明治後半期に見られる「ラ行子音」に対する記述

前節で見たように、英文典では、明治前期から、ローマ字表記の音図や、英語音とラ行子音の関係性を述べたものが見られるが、国文典では、この時期において、ラ行子音の発音法などを詳しく記述したようなものはあまり見当たらない。

明治 20 年代の国文典の記述としては、林甕臣（明治 20/1887）『尋常小学五十音の発音法』あたりから、「ら行発音の舌唇作用」として、「ら行は舌尖にのみよれる音にて、「らりるれろ」のらは、舌を巻きて、息気を舌尖にふれしめ、あ音をいだすがごとくすべし」というような記述が少しずつ

見え始めるようになる。落合直文（明治26/1893）『普通日本文典』では「多行、奈行、良行は舌に触れて出づる音なるをもて、之を舌音といひ」と書かれているのみである。国学の流れを継承する当時の国文典の、文字や音に関する項は、仮名遣いや音便等の音変化を中心とした記述が大半を占め、単独の音声それ自体には注意が向けられていなかったようである。

明治30年あたりになると、英語を学んだ日本人研究者たちによって、日本語の音声の分析が本格的に始まる。西洋音声学の分析法なども導入され、音声分析はより精密なものになっていく。以下では、明治30年代以降に見られるラ行子音の記述を見ていきたい。

まず、この時代の英文典、片山寛、アール・ビー・マッケロー（明治35/1902）『英語発音学』には、前節で見たような、英語の【R】の発音についての記述がある。（一重下線は筆者による。以下同じ。）

r音を発するには舌端口蓋に触れずして少々後方に向ひ屈曲す、斯く屈曲したる舌と硬口蓋の間を空気烈しく通過してrを生ずるなり、故に此口構へにて空気を通ずる間は何時迄も此音を継続することを得、此音には強き息の力を要す、ラ、リ、ル、レ、ロの父音⁽³⁾には舌端、口蓋に触るるを常とす、之れ即ちdなる止音の口構へと稍同じく其差は之に在りてはdに於けるよりも触接部一層内部に位するの一事あるのみ、西洋人が日本のラ、リ、ル、レ、ロはda, di, du, de, doに類すと云へるは之が為なり

英語の【R】が示す音と、日本語のラ行子音を「舌端」が「口蓋」に触れるかどうかという視点から考察している。これによれば、英語の【R】の発音は、舌端が口蓋に触れないが、日本語のラ行子音は、舌端が口蓋に触れるということである。このような観点から、英語の【R】の発音と日本語のラ行子音の間に明らかに違いがあることを指摘している点は注目値する。

同じく『英語発音学』において、【L】の発音については以下の記述がある。

此音は英語諸音中本邦人に取りて最も困難なるものと普通見做さるる処のものなれ共著者の経験に依れば必ずしも然らざるが如し。rを生ずるの法はlを生ずるに稍似たり、然れ共舌の尖端は堅く硬口蓋に附着し為に空気は其両側を廻り出づ（中略）lを生ずるの困難なるにより寧ろrに近き日本のラ、リ、ル、レ、ロの父音を之に代て足れりとす

るは甚だ宜しからず

全体的に、前節で見たような明治 20 年ごろの記述と比較すると、より分析的な記述となっていることが分かる。日本語のラ行子音を、英語の【R】の発音とは異なるものの【L】よりは【R】に近いとしていることにも留意しておきたい。

では、明治 30 年代における日本語音の分析についての記述を見てみたい。

岡倉由三郎（明治 34/1901）『発音学講話』では、一般のラ行子音、「捲舌」のラ行子音、「極めて柔和に響く」ラ行子音の 3 種類を説明している。

岡倉は、一般のラ行子音については【R】を当てている。「捲舌」のラ行子音については「極めて烈しい印象を耳に与へるもので、それがため、強く勇ましいことばを用ゐようとする職人肌の人たちには、東京語に於て、盛んに用ゐられるのである」と述べ、これにも【R】を当てている。「かの国々（引用者注：英仏独）には、常のルか、又は捲き舌のルを示す r 文字の外に」という表現があるため、英仏独では、【R】が示す音に、日本語の一般のラ行子音と、巻舌の音が含まれるという理解であろう。「極めて柔和に響く」ラ行子音については「東京あたりでは俗に舌の長い人と云はれる物の言ひ方をする人に於ての外、全く聞かれない音であるが、東北の人の間には、往々認めるものである」とし、これは【L】で表記される音で「側音」であるとしている。

岡倉は、英語を専門的に学修している。日本語の子音について、「父音、鼻音、促音、分類表」というものにまとめており、日本語のラ行子音は「摩擦音（刺音）・舌端音」に分類している。英仏独で「側音」とされる音（【L】で表記される音）は「摩擦音（側音）・舌身音」とされており「中央語にはないもの」という注がつけられている。

以上をまとめると、岡倉の記述からは、日本語のラ行子音は英仏独の【R】が示す音と認識していること、一般のラ行子音は巻舌ではないが英仏独にもこの音は存在し、区別せず【R】で表記していることが分かる。「摩擦音」「舌端音」という分類を導入していることにも注目しておきたい。

平野秀吉（明治 35/1902）『国語声音学』の「ラ行の父音（r）」には、以下の記述がある。

此の父音は、声が懸壅垂を衝き動かして、規律ある顫動を生ずるので、顫動音である。其が更に舌頭と口蓋及び齒槽突起との狭窄門に摩擦せ

られるので、摩擦音で、続音である。之に母音を綴合すればラ ra ルイ ri ル ru レ re ロ ro の綴音が出来る。其中でルイは標準音には無い。是音は、顫動が高ければ高いほど、一種の強き感じを人に与へるものなれば、もとより舌頭の少々反り身の気味ある上に、彼の芝居役者の台詞の如く、或は所謂ペランメー語の如く、一層顫動を高からしめる為に、流出する声の方向に逆ひて、舌頭を内へ巻き込むことがある。此際には舌頭にも著しい顫動を生ずるので、之をラ行の卷舌音と云ふ。

ここでは、ラ行子音に【R】を当てており、「顫動音」「摩擦音」に分類している⁽⁴⁾。卷舌音との関係性への言及もある。ラ行子音の特徴を「顫動音」としており、それが強いかわいかによって、卷舌になるかどうかが決まると述べている。また、「リ」のみ子音が異なることを指摘している点にも注目したい。これは、前節で見たヘボンの記述を想起させる。また、ラ行の分析の最後に【L】について「外国音で、国語音で無い」との記述がある。

「リ」の音については、高賀誼三郎（明治 40/1907）『発音と口語』のラ行音の説明箇所にも、「但りの時は舌か他の四音より自然にあがる」という記述がある。高賀は、ラ行音の「音器」を「舌身上顎」、「音状」を「摩擦」としている。

以上見てきたように、明治後半になると、西洋音声学の枠組みで日本語音の説明をすることが一般的となり、より詳細な分析や記述が可能となってきた。明治前期からのラ行子音を【R】で表記することが継承され、英語音と日本語音との相違点に注目する記述も現れる。【R】が表示する音の本質として、卷舌かどうかはそれほど重視されない点も特徴的である。英語の【L】が示す音は、標準のラ行子音ではないという認識も現れている。

4 IPA の導入と音声学協会での議論

大正時代に入ると、IPA が導入され、音声研究の中で、日本語音を IPA で表示する方法が考えられるようになる。前節で述べたように、IPA 導入以前は、ラ行子音は【R】で表記されることが多く、そのうえで英語の【R】の発音との相違点が指摘されていた。本節では、IPA 導入によって、ラ行子音に対する考察がどのように変わっていったのかを示したい。

加茂正一（大正 13/1924）『万国発音記号手ほどき』は、IPA の各記号の

発音を、日本語音と照らし合わせながら説明した著作である。加茂は、日本語のラ行子音に **【ɹ】** という記号を当て、この記号について、以下のよう

に説明をしている。

舌の尖を上あごに接して、其の間に息を通して出す摩擦音が **【ɹ】** である。

震動音にすると **【r】** になる。

加茂は、**【ɹ】** 以外に **【r】** という記号も紹介している。この **【r】** については「舌を上あごに接してふるはせる音である」「所謂巻舌の音である」とある。つまり、ここにおいて、アルファベットでは不可能であった「巻舌の音」と「巻舌でない音」との区別が可能となったわけである⁽⁵⁾。二宮哲三（大正 14/1925）『国語声音小解』にも「ɹ 音（ラ、リ、ル、レ、ロ）」と書かれており、加茂と同じく **【ɹ】** を当てている。

しかし、日本語のラ行子音に **【ɹ】** を当てることが一般化したわけではない。むしろ、IPA の導入によって、日本語のラ行子音の本格的な考察が始まったといってもよい。

大正 15（1926）年、上田万年、藤岡勝二、新村出ら当時の言語学者たちが発起人となり、音声学協会が設立される。機関紙『音声学協会会報』（以下、『会報』とする）では、多くの会員たちによって「北風と太陽」の話を、IPA で表記する試みがなされている。日本語音を IPA で写し取るわけだが、ここでラ行子音に使われている記号に注目してみると、**【r】** **【ɹ】** **【l】** 他、これらに補助符号をつけたものなど、かなりのバリエーションがあり、当時、ラ行子音に当てる IPA が定まっていなかったことが見て取れる。

実際に、『会報』の中でも、ラ行子音についての議論がたびたびなされている。まず『会報』第 1 号（大正 15/1926）で、「日本語の標準的発音系統を定めたい」との問題が提起され、その後の研究会や『会報』第 2 号以降で、日本語の様々な音についての考察が展開される。ラ行子音については、第 2 号に「第二回研究会報告」として「ヤ行やワ行の表記法、ラ行やフの発音法、その他、等々、中中さう手早く決定する訳に行かないものが沢山あるから、追迫に不断の研究と議論を続けて行かう。各方面の意見を広く誌上で発表し合はう、といふことになった」とある。

『会報』第 3 号（昭和 2/1927）では「誌上での研究会」として、森正敏が「ラ行の子音に就いて」という問題提起をし、第 4 号（昭和 2/1927）か

ら早速議論が始まる。明治期以来の、英語の【L】【R】が示す音とどう違うのかという議論も再燃し、「ラ行の父音に就ては人に依つて大層意見が違つてをります。加茂正一氏はさかしのrを、プレトネル氏はさかしのrにlを附けたもの、また岡倉先生の英語小発音学には大文字のRが用ひてあります（中略）この問題は研究の上、協会が統一されんことを望む次第であります」という意見が出る。

第9号（昭和3/1928）あたりから、日本語のラ行子音に対し、様々な研究者たちが意見を戦わせる展開となる。それまで「ラ行子音」という枠組みだったものが、「ラ行父音デ英語ノrノ様ナ音ガ出ルノ母音ト母音トノ間デ出ル」、「舌先はうわあごに触れない」が「触れる場合はり、ルに多い」というような、前後の音の影響による子音の変化、ラ行という枠組みの中での子音の差異など、細かな音への言及もなされるようになっていく。この問題の考察にあたっては、英語の【L】と【R】との関連性において、各音声の特徴を調音点に置か調音法に置くかといった議論もなされる。様々な研究者たちが議論をする中で、ラ行子音について、舌の位置、調音法などが人によって違うことが明らかとなり、「ラ行子音の本質」とは何かという議論へと展開していく。これは、その後の音韻論の導入を連想させる。

最後に、近代の音声研究史上、高い評価を受けている佐久間鼎（昭和4/1929）『日本音声学』の記述を参照したい。佐久間は「流音」の中の「ラ行の子音」という項で、「これをrとするかlとするかは、科学上格別大切な事項ではない。無理にこれを一方に組みこむことは、実用上にはともかく、研究上には必要のないことである。その子音の性質を明かにすることが、先決問題である。」と述べ、従来、「文字」ととらわれた研究方法を脱却すべきであると主張する。

佐久間は、「イギリス語」の【ɹ】のIPAで表記される音との比較を行い、以下のように述べる。

「ラ」行の子音では、舌のへりが一旦歯ぐきうらに触れるので、この点で【ɹ】とちがふ。そのふれ方は、破音におけるほど力のはいつた仕方ではなく、ごく軽いのであるが、とにかく舌のへりまたはさが、歯ぐきのうらの出ばり（歯槽突起）の前後に触れるのである。その調音域は、イギリスのrすなはち【ɹ】よりも前方であり、前歯に近いといはれてゐる。（中略）イギリスの【ɹ】に摩擦のひびきが少く、一体に

母音めいてゐるとは、一般に認められてゐることであるが、「ラ」行の子音にもこのことが観察される。[ɹ] では舌面が少し凹形になるといふが、「ラ」行の子音では、普通にはそれがほとんど見られない。舌のさきを巻きかへすか否かは、「ラ」行の子音にとつて、さほど大切なことではない。

そのうえで、ラ行子音の本質を以下のように結論付ける。

「ラ」行の子音は、次の母音の異なるにつれて、調音の部位が同一でない。舌の動き方もちがふ。調音域だけについて考へると、[t]・[d]・[n] のときと多少前後のちがひがあるが、同じ位置で破音を出すことも流音を出すことも出来るから、舌の触れる位置が差別の目じるしとはならない。かくて、この子音の特性は、その運動における特殊の様式にあるとしなくてはならない。

そしてここでいう「特殊の様式」を佐久間は「調音の仕方」とし、「舌尖が口蓋に触れるまで」「触れている間」「はなれるとき」の3つの時相に分け、これらが、後続母音によって異なること、IPA の [l] との相違点、[d] との類似点などを詳細に説明している。

IPA の導入や、音声学協会での問題提起、議論などを経て、ラ行子音に対する言及は、かなり精度の高いものとなってきたと言えるだろう。

おわりに

本稿では、近世期の蘭学資料から昭和前期まで、主に日本人研究者たちが日本語のラ行子音をどのように捉えてきたかを見てきた。

明治前半期までは、日本語の音自体を考察するような記述は、国文典の中にはほとんど見られない。一方で、アルファベットという音素文字を獲得し、オランダ語や英語を習得した人々の記述には、他言語の音との比較という形で、日本語音を分析したものもあった。特に英文典においては、英語の [R] の発音との類似性が示され、ヘボンのローマ字表記とあいまって、ラ行子音 = [R] の表記が一般化した。明治 30 年頃からは、西洋音声学の概念を利用し、英語を習得した研究者たちが、新たな視点でラ行子音の説明に挑んだ。西洋音声学の調音点、調音法などの枠組みを使い、内省による分析を行い始めた時期である。英語の [R] の発音とラ行子音の相違点などにも言及された。その後、IPA が日本に導入され、ラ行子音を IPA

のどの記号で表記するかという問題が発生した。音声学協会が設立され、従来の「文字」や「分類」に影響された音声分析から脱却し、純粹に音声のみを考察する視点が養われていく時代となる。音声実験なども数多く行われ、より科学的な分析が可能になった時代でもある。

本稿での調査過程では、主に、国立国会図書館デジタルコレクションを使用した。「ラ行子音」「ラ行の父音」などで検索をかけたが、近代には膨大な文献が出版されており、本稿で取りあげることができなかったものも多い。本稿はあくまで、近代のラ行子音研究の一端を示したものと捉えていただけたらと思う。音声学協会成立後の具体的な議論や、音韻論導入後のラ行子音に対する考察は、また別の機会に論じたい。

注

- (1) 詳細については、内田智子（2015）参照。
- (2) 阿久津智（1995）は、『日本を知る事典』を参照し、明治期以前の西洋人たちが、日本語のラ行子音に【R】を当てたことを述べ、彼らの耳にラ行子音が【R】に近く聞こえた可能性とともに、前例を踏襲して規範的に統一した可能性にも言及している。
- (3) 当時、現代の「子音」のことを「父音」とも称していた。
- (4) p.83 に子音の分類表があるが、そこでは「ら行（r）」を、「舌頭」「顫動音」としており、「顫動音」と「摩擦音」は別のものとされている。
- (5) 加茂は、【r】の記号と同じページに【R】という記号も掲載しており、「舌を上あごに接してふるはせる音」という記述とともに、「のどびこ」をふるはせて出す音が【R】である。フランス語で‘r grassayé’と云はれてゐる音であると述べている。

使用テキスト

青木輔清（明治 4/1871）『横文字独学 英学部 初編』紀伊国屋源兵衛
 青木輔清（明治 18/1885）『英学童子解』同盟舎
 亜遊居人（明治 5/1872）『英学教授』弘成堂
 浦谷義春（明治 6/1873）『英学辞訓』森本太助
 英語研究編輯書編（明治 42/1909）『ローマ字の話』英語研究社
 大槻玄沢（天明 8/1788）『蘭学階梯』（『日本思想大系 64 洋学上』所収）
 岡倉由三郎（明治 34/1901）『発音学講話』宝永館書店

- 落合直文（明治 26/1893）『普通日本文典』松村九兵衛
 音声学協会編（大正 15/ 1926 – 昭和 4/1929）『音声学協会会報』
 片貝正晋訳述、ウェブストル（明治 18/1885）『スペルリング独学』岩井書
 房
 片山寛、アール・ビー・マッケロー（明治 35/1902）『英語発音学』上田屋
 加茂正一（大正 13/1924）『万国発音記号手ほどき』文友堂書店
 木田吉太郎編（明治 18/1885）『英語独案内』東雲堂
 高賀誂三郎（明治 40/1907）『発音と口語』小野強
 佐久間鼎（昭和 4/1929）『日本音声学』（1963 年復刻版 風間書房）
 佐藤重道編訳（明治 21/1888）『英語発音解』大倉孫兵衛
 島一徳（桂潭）校（明治 4/1871 序）『童蒙英学初歩』
 高橋五郎（明治 19/1886）『英米語学独案内』加藤鎮吉
 中野柳圃（文政 9/1826）『西音発微』（杉本つとむ（1998）『日本語研究の
 歴史』所収）
 長野一枝訳（明治 20/1887）『ウキルソン氏第一リードル講義』吉岡平助
 二宮哲三（大正 14/1925）『国語声音小解』執行文庫
 林甕臣（明治 20/1887）『尋常小学五十音の発音法』大日本文章改良会
 平野秀吉（明治 35/1902）『国語声音学』国光社
 前野良沢（天明 5/1785）『和蘭訳筌』（『日本思想大系 64 洋学上』所収）
 松岡啓（明治 4/1871）『洋学楷梯』小川金助
 吉村秀蔵訳（明治 20/1887）『英語発音独案内』大辻文盛堂
 J.C. Hepburn 『和英語林集成』（明治学院大学図書館『デジタル和英語林集
 成』の各版）

参考文献

- 阿久津智（1995）「ラ行子音について」（『立教大学日本語研究』2 号）
 内田智子（2015）「蘭学者の音声分析と五十音図」（『日本語の研究』11 巻
 3 号）
 杉本つとむ（1967）『近代日本語の新研究』桜楓社
 高橋正夫（1986）「ラ行子音は米人にどう聞こえるか」（『音声学協会会報』183
 号）

※引用文中の旧字体は現行の字体に直した。

※引用文中、誤記と考えられる箇所についても原文通りとした。

(本学文学部准教授)

《キーワード》

近代、ラ行子音、英文典、音声分析、IPA